

No. 1065

さよなら モナ・リザ

4月20日から上野の東京国立博物館で開かれていたモナ・リザ展。閉幕を迎え、観客はどっと増えた。閉幕の前日6月9日は、日曜日とあってこれまで最高の6万1千人が訪れ、長い行列をつくった。せめてこの機会に世界の名画モナ・リザを見ておこうと訪れてはみたものの待たされること2時間あまり。そしていざ対面は30秒から1分。

強い日ざしのもと、アイスクリームやコーラが飛ぶように売れてモナ・リザさまさま。“入場はここまでです”の立て札、閉幕ぎりぎりに駆け込んで間に合った。150万人以上の観客をあつめたモナ・リザ。“終りですてください”のかけ声に未練がましく振り返る。多くの話題を残して、モナ・リザ展は終わった。

さようなら モナ・リザ。モナ・リザは14日からモスクワプーシキン美術館で公開される。

カメラ風土記

結城つむぎの里

「結城つむぎ」、それは木綿のような素朴な肌ざわりの中に、優雅な味わいをあふれさせている。筑波山の山すそに結城家の城下町として栄えた茨城県結城市、そこが結城つむぎの里である。街のたたずまいは、いにしへの面影をたたえ、由緒ある歴史を感じさせる。そんな家並の一角に、今も「糸をつむぐ」老婆の姿がある。無形文化財のひとり、大里ふくさん六十六才。より細く、そして節(ふし)の少い糸をつむぐその作業は、いつ果てることもない長い営みだ。一反分の糸をつむぐのに一ヶ月余りの才月がかかるという。

街はずれにある大桑神社。荒れ川として名高い鬼怒川の流れが、桑にふさわしい土壌をこの地にもたらした。

「かすりくり」。つむいだ糸は模様によって細かくくられる。田中林次さん六十一才、彼も無形文化財のひとりだ。

結城家十八代の墓。桑畑のかたすみに打棄てられてある。

くくられた糸は、草木によって藍色に染めあげる。薄く、だんだん濃く、浸してはしぼり、しぼっては浸す。そのくりかえしは三十回をこえる。

「ゆく春やむらさきさむる筑波山」江戸の昔、与謝蕪村は、この地に遊んだ。

手から手へ、すべて手仕事にたよる「結城つむぎ」は「いざり機」とよばれる最も古い織機によって織られて行く。北条きのさん六十八才、彼女も無形文化財のいない手だ。老いの目で、細かい模様をさぐっては、箆(おさ)を打込む。お腹の中にいる赤子の時から箆(おさ)の音を聞きながら育ってきた結城の女たち。いつか担い手は嫁の手から娘の手へ、——結城つむぎの里に機(はた)の音がたえることはない。